

特別読み切り

食育 Essay 59

食から元気なからだと豊かな心を

生産者の皆様とつながることで
子どもの心も「いただきます」の心も育つ
大切なことを教えていただいた真っ赤な季節



少しずつ葉の色が変わり、ジュンコ先生が大好きな赤色の季節がやってきました！赤とえばりんご。赤い丸玉がたわわに実るりんご園の風景は、その場に立ってみなければ感じるこのできない感動的な風景。この風景を体感することはもちろんのこと、青森県の特産品であるりんごを自分たちの手で収穫する喜びを体験してほしいとの願いから、毎年秋になるとりんごもぎに親子で遠足に出かけます。りんご園に到着すると、園を営むおじさんとおばさんが出迎えてくださり、ご挨拶の後に子どもたちにりんごの種類やもぎ方を教えてくださいとお二人。子どもたちは、大きな農園一面に生い茂るりんご世界を歩きながら、目に留まったりんごに手を差し伸べ、親子で収穫。

それが当たり前の秋の遠足でしたが、今年の遠足は違いました。りんご園のおじさんとおばさんが高齢のため、りんごを育てることができなくなり、今年の遠足が最後という話をお聞きしていたからです。通い続けたそのりんご園での遠足はこれが最後。そのような思いを背負って出かけた今年の遠足。

りんご園に到着すると、思うようにお話ができなくなったおじさんの横で、おばさんが小さな声でおじさんを助けるように声をかけながら、りんごのもぎ方を教えてください、今年は昂林（こうりん）という品種であること、そして今年で最後のりんご栽培であることをお話ししてくださいました。私もご縁をいただき20年前から毎年お邪魔してきたこと、おじさんとおばさんが大事に育ててくださったりんごであることを子どもたちに伝え、「ありがとうの気持ちをこめて収穫しましょう。」とご挨拶をさせていただきました。

いざ収穫とりんごの木々の中をゆっくり歩いていると、隣にいたおばさんが「歳には勝てなくてね、毎日600本の木々に『実ってくれてありがとう。育ててくれてありがとう』って声をかけながら作業しているんですよ。こうして子どもたちに会えなくなるかと思うと寂しくて」と。

次の日の朝、登園してきた女の子に「りんご美味しかったね。」と話しかけると、その横にいたお母さんから「今朝、りんごを家族で食べようとした時にお姉ちゃんに向かって娘が『お姉ちゃん、おじさんとおばさんが一生懸命つくったりんごだから、大事に食べてね。』って話したんですよ。」とお話ししてくださいました。

甘くて、優しい味のおじさんとおばさんが大事に育てたりんご。涙がぼろりとこぼれ落ち、すこししょっぱさも感じた今年のりんご。生産者の皆様とつながることで、子どもの心を育てていただき、「いただきます」の心も育つ大切なことを教えていただいた真っ赤な季節。

生産者の皆さんが大切に育ててくださった野菜や、果物、お肉にお魚お米に卵。ウエルの料理人さんが腕をふるってさらに美味しくなり「美味しい！」が街中から聞こえる季節です。ジュンコ先生も「いただきます！」

- 書き手 - 千葉幼稚園 園長 岡本 潤子

